

去年の年末12月27日行われたケニア大統領選挙。誰もが、いつものように平和的に行われ、新大統領が選出されるだろうと想像していた。なのに、結果として歴史に残る最悪な選挙となっている。

簡単に状況を書いてみると、与党の現大統領キバキと野党ライラ氏一騎打ちのような格好となっていたのだが、30万票差でキバキの続投が決まりかけていたところに「票の数え方に不正があった」との情報が流れ始め、野党のライラを擁護する人々によって暴動が始まっていった。この2人は42民族あるケニアで、22%を占めるキクユ族のキバキ、16%を占めるルオー族のライラ。つまり多数部族の代表であり、キクユ族は、首都ナイロビを囲む中央ケニアと呼ばれる地域に多く、ルオー族は、ウガンダとの国境近くのビクトリア湖沿いの西ケニアと言われる地域に多く住んでいる。

問題は、票の数え方や数えられていない投票箱が発見されたとかというより、民族同士の根深い対立の様相を見せ始めたところにある。ケニアの大統領はイギリスからの独立後、キバキで4代目であるが、初代大統領のケニヤッタはキクユ族、2代目大統領のモイは、少数民族のカレンジン族、そして3、4代目のキバキはキクユ族。

なぜこんなにも民族にこだわるかというと、やはりそこには民族優遇の背景があるのだ。ルオー族は、政治的にやはり遅れをとっている。モイ大統領は、汚職まみれの大統領として長期政権を続けてきた。その怒りが、4年前の「汚職を追放しよう」とスローガンを掲げたキバキを大統領にした。しかし、「キバキも汚職を追放できていない」とルオー族は言っている。

ケニア国内は、民族移動が激しい。経済が発展している大都市に向けて民族は移動する。その経

済が発展している所と言うのは、キクユ族が住んでいる町、また土地を広大に所有するマサイ族から買い、キクユ族が発展させた町などが多い。キクユ族は、農耕民族で、商売の才もあり、ビジネスを得意とする人達が多い。経済の面で優勢なキクユ族。政治面でもその他の民族をリードしてきた。いろいろな民族が同じ地域に住むということが、経済の発展に伴って増えてきている。スラムなどは、民族のるつぼである。

そういう場所で、ルオー族は日ごろのストレスを爆発させるがごとく、キクユ族を殺戮し始めたのだ。同じ町に住む、いつもは仲良くしていたはずの住人同士をナタや棒で虐殺し始めたのだ。

スラム、学校、教会、道ばたで、男女、年寄り、子どもを問わず。そもそも違う民族同士が、植民地政府イギリスが決めた国境の中で暮らしている。そして町を離れるキクユ族。国内難民となってしまった。世界的にケニアの名前を政治不安定な国として有名にしてしまった。ルワンダの惨劇を思い出さずにはいられない。民族同士が殺しあう。日本人の私には理解しがたいところもあるのだが、キクユ族の夫は言う。

「アフリカの恥だ、ニュースを見たくない」

「民族を超えていかなければ、ケニアを発展していくことは出来ない」

12月から現在まで、観光客は40%も減っている。経済的に計り知れない代償を払っている。「民族の知恵を。人間の知恵を」と夫は繰り返す。

